

---

# チートの旅

メタポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートの旅

### 【Nコード】

N6056P

### 【作者名】

メタポ

### 【あらすじ】

ヒロインがチートです旦那もチートです

ヒロインは不老不死です

ヒロインは旦那至上主義です、旦那以外は基本的に虫です

ヒロインは髪を短く（肩までに）したただけですが男のこに見えるそうです

## 旅立ち

「…世界を旅しておいで。」ですか？」

「どうしたんだい？僕の可愛いアリス？何か問題でもあるのかい？」

「ううん、でもご主人様と会えないのは寂しいです。」

「僕も寂しいよ、一時いっときでもお前の側を離れたくはないよ、でも君に見てきて欲しいんだ、僕の側以外の広い世界を。」

「世界を…ですか？」

「ああ…でも君に知って欲しいんだ僕の側以外の世界を、それに逢いたければ何時でも瞬間移動テレポートで会えるから」

「本当ですか？…嘘じゃないですか？」

「嘘じゃないよ、それに君も僕も時間だけは無限にあるんだ、息抜きだと思つて楽しんでおいでよ」

「……わかりました。でも約束してください。」

「…何を？」

「う、浮気はダメです、絶対！！」

「ふっふふっそんなこと気にしてたの？安心しなよ、僕が好きなのはアリス、君だけだよ…さあ、別れが惜しくなるもう行きなさい…ねっ？」

「…じゃあ、行つてきますね！」

「行つてらっしゃい」ノシ『瞬間移動テレポート』

## まず始めに

「うゝん」

アリスは困っていた

最愛の恋人であり大好きなご主人様に、「世界を見て回っておいで」と、言われてとびだして来たのは良いものの、まず何処に向かおうか迷っていた。

アリスが何処に向かおうかと迷っていたとき、近くの茂みがガサゴソと揺れたかと思うと、オークが三体出てきた。

オークとは豚の頭とふとった人の体を持っている下級の魔物だ、人語を話すことも出来るがいかんせん頭が悪く凶暴である。

三体いる中の一体がアリスを見つけると、

「なあんだあゝ、にんげんのがきがあゝ」

と口をいびつに歪めて言う、他の二体も

「がき、くう、おれ、つよい、おまえ、しぬ」

「がきいゝおかすゝくうゝだのじいゝ」

と間の抜けた声を上げた。

が、アリスは特に怯えることもなく

「ありがとうございます、魔力抑えるの忘れてました。そして…さようなら」

といい軽く右手の人差し指をオークの首に向けて振る、次の瞬間「ぼとつ」というおとと共にオークの首が落ちる、アリスはオークの返り血が服に着くのも気にせず死んだオークに向かって吐き捨てるように告げる

「でも『がき』って言うのは余計ですよ、コレでも気にしてるんですから」

アリスは自分でも140センチほどしかない背やぺったんこの胸は、子供みたいだと思っている、でもそれとコレとは別と心の中で呟いた。

その後、まず自分にリミッターを十段階かける、ご主人様ほどではないがアリスの戦闘能力は、以上に高い魔力だけでも一般人を1とすれば軽く

十兆を越えるという規格外な量だ、国などに仕えたりするのはごめんなのでバレないように幾重にもかけ常人の二倍魔法使いでも少し多い位の量にする、次に髪だ。

現在アリスの髪は艶やかな黒髪だ、この世界に黒髪は居ないことはないが大変珍しい、なのでこの世界では割とよくいる金髪にする長さもこれまでの足首ほどではなく、ちょうど肩胛骨位けんつこつの長さにする、余り長過ぎても邪魔だが短くても、基本的に女性髪は髪を伸ばしているので目立つ、ちょうど良いくらいの長さである

アリスは、取り合えず近くの村に行くことに決めた。

## 村へ

アリスは、近くの村に向かっている途中魔物になるべく出会うようにしていた、何故ならアリスはなれなければいけないからだ、リミッターをかけたまま戦うことに、

アリスは今一体のオークと戦っている、以前戦ったときは、リミッターをかけてはいなかったので、苦戦どころか相手にもならなかったが今は違う、オークは下級の魔物であり人語をはなせるがそこまですぐに倒せるのもないのだから素人でも、二人がかりで倒せるレベルの敵だ、だがそれも大人の場合だ、子供ではかなり苦戦する早くはないが一撃が強く避けなければ一撃で殺されてしまう、別にアリスなら殴られてもすぐに再生するのだが人に見られるのはまずい、なのでむらにつくまでに出来るだけ慣れなければならないのだ、

「えいつ」

アリスは右手に持ったナイフでオークに切りかかりすぐに下がる、すると一瞬前までアリスがいた場所をオークの混紡が通る、するとまたアリスはオークに切りかかりすぐに下がる完璧な、ヒットアンドアウェイをしている、何どもかの切りかかりをしたときついにオークが倒れ失血死する、

おびただしい血が中りに、血溜まりを作つくっている。

「あゝあ、シャワー浴びたいな」といいながらナイフを広いオークの腰に着いていた巾着袋を漁ると中から数枚の銀貨が出てきた、アリスがその銀貨を自分の巾着に入れて丘の上まで上ったところやつと村に着いた。

着いたとたんアリスは一泊2食付きで銅貨十枚の宿（銅貨百枚で銀貨一枚銀貨百枚で金貨一枚金貨千枚で白金金貨一枚である）をとりシャワーを浴びて眠ったのであった。

## ギルド

宿に着くなりすぐに寝てしまったアリスは次の日の朝早めに朝食を食べた後ギルドに向かった。

「ギルドとは魔物退治から護衛、庭の草取りなどいろいろな仕事をギルドに登録している冒険者に、紹介し依頼者に依頼に応じて依頼料を取ることで運営される派遣会社のようなものである、またギルドに登録するには年や性別は関係なく実力によりs s sからeまでのランクに分けられ自分のランクと同じか二つまでのランクさの依頼を受けることが出来る、またランクはギルドへの貢献度や実力で変化する。」

アリスがギルドに入ると中でたむろしていた人間からの視線を一身に受けた、当然だろういくら実力次第とはいえ、見た目十歳くらいの少女が来るような場所ではないが、気にせずアリスは、受付に向かい受付のお姉さんに話しかける。

「あの…ギルドに登録したいんですけど。」

「は、はあ」

とお姉さんが軽く首を傾げながら受付にある机の下から水晶玉を取り出す、確かにギルドは実力次第で子供でも登録できるが、見た目十歳くらいの少女が入ることはあり得ないらしい、その証拠に困惑を隠せないでいる。

「この水晶にふれてご自分の名前をいってください、この水晶は、触った者の力を測りどのランクがふさわしいかを測定するための者なのです。」

「えーっと、わかりました…アリスです」

アリスが名前を告げたとたん水晶にCの文字が浮かび上がった、受付のお姉さんは驚きながらもアリスに机の下から指輪を出して渡してくれた、

「ご登録ありがとうございます。アリス様はCランクからのスター

トでございます。先ほどプレゼントさせていただいた指輪は、倒した魔物の数や種類などが自動でカウントされポイントが溜まります、ギルドにてポイントと引き替えに報酬が支払われたり身分証名の代わりになるので無くさないように気をつけてください。」

「はい、わかりましたありがとうございます。」

「さらに、魔力を少しでも流していただければ脳内に直接最新の依頼書や魔物の情報が送られます。」

「へへ便利ですね、ありがとうございます。」とアリスはお礼を言ってその場を離れた。

## 初めての依頼

アリスは、ギルド登録後すぐに依頼の貼ってある掲示板を見に行った。

草むしりや魔物退治の中に一つだけ護衛の依頼があったので受け付けのお姉さんにいって受けさせてもらった。

お姉さんの話ではもう三人一緒に依頼をする人がいるそうだが、アリスは受付の人にお礼を言っていると既に他のメンバーの待っている待ち合わせ地点に急いだ。

おかしい、今回の護衛の依頼は、俺たちのパーティにもう一人加わって四人で行うらしいが、もう一人がこない、ギルドで渡された指輪（以下ギル輪）でさっきそんな連絡を受けたが未だに、もう一人のメンバーがこない黒魔法使いのメルと俺と同じ長剣使いのジョセフは、いい加減待ちあきたのか俺たち（あたいたち）だけでいいから行こうと言いつつ始末だ。

かく言う俺もそろそろ限界だ、というときにまだ十歳くらいのガキが手を振りながら走って来やがった、どうやらあのガキがもう一人のメンバーらしいが、どう見ても役にたちそうもない、まったくギルドの野郎ガキのお守りまでさせるきかよ。

はあはあはあ

急がなきゃ、マダ時間はあるけどまたせるわけにはいかない。

アリスは走って集合場所まで行くと案の定依頼人含めアリス以外の護衛の人が来ていた。

「すいませ〜ん、遅れました〜」

まだ待ち合わせ時間よりも少し早かったがアリスが一番遅かったの

で謝った。

今回は小太りなおじさん（依頼人かな？）

と16、7才くらいの男女（パーティかな？男の人二人に女の人一人か）

といっしょに商業都市『バーザ』まで行くらしい着くまでの宿代と食事代は依頼人が出してくれるそうなので、今路銀がすっからかんのわたしには、ぴったりの依頼だった。

ただ依頼主を警護しているだけではつまらないので、今回いっしょに護衛をしている人にいろいろと質問しようと思ったので、女の護衛の人に声をかけてみた。

「あのっ！！」

「ん？どうした？」

「私アリスっていいいます」「ん？ああ自己紹介かあたいはメルって言っただ隣が無表情なのがジョセフ目つきの悪いのはカイトっていうんだ」

「メルさん達はパーティを組んでるんですか？」

「ああ、そうだけど？」

「実はあたいた等三人共幼馴染なんだよ」

「三人とも仲が良いと思ったら幼馴染ですか」

「あのっ「いい加減にしやがれ」…え？」

「カイト！？」

「ふざけやがって、いい加減にしろよ、初依頼のど素人がCランクの依頼受けてんじゃねえよ、お前のカバーする俺らの身にもなれよ」

「ふざけやがって、いい加減にしろよ、初依頼のど素人がCランクの依頼受けてんじゃねえよ、お前のカバーする俺らの身にもなれよ」

あゝあ、いっちまったよ、へっへへっ

初依頼ってこたあDランクだろ？

下っ端が調子こいてるからわりいんだよ、

「……………が……………す」

あ？

「…違います」

チガイマス？

「違います！！」

……………違います？

「はあ？違いますう！？何言っただよぼうず、初依頼ってこたあDランクってことだろ？」

「違いますよっ、ほらっ！！」

といってギル輪を見せてきた、見てみると確かにアリスCとある、  
「じゃあ何で初依頼だなんて嘘ついたんだ？てつきり報酬目当てできたとおもったじゃねえか」

「……………すいません、Cランクになって初めての依頼って言いたかったんです」

「あゝ、そっか、悪かったなぼうず、勘違いしちゃって、よろしくな？改めて自己紹介だ、俺のBランクのカイト・ライーニアスだ、見た目のとおり戦士、前衛だ」

「俺は、ジラシス・シヨセイフォンス、Bランクの戦士だよろしくな”ぼうず”」

「私は二人と同じBランクの魔法使いメル・ラミスよ、宜しくアリス”君”」

「…よろしく」

「…よろしく」

どうやら私は男の子だと思われるようだ、  
でも、別にそれは問題がない私はご主人様一筋だから、ただいま問題なのはジョブだ、魔法使いは下級から概念・オリジナルレベルま

で使えるが加減が出来ない、剣も大剣どころかロングソードではない今あるのは15センチほどのナイフが四本くらいである、よしっ「でわ改めまして皆さんよりも1ランクしたのアリスナイフ使いですよろし——」

わたしがよろしく願います、と言い掛けたとき近くの茂みから男が私の前に三人メルたちの方に十五人ほど飛び出してきた

「おいガキ共、わりいこたあ言わねえから女と金おいてとっと逃げな」

と一人が挑発してきた、「イヤだ」

と私が言ったとたん剣を抜いて三人同時に飛びかかってきた、がまず私はナイフを三本抜き一本ずつ左右の人差し指と中指に挟み三本目は右手で軽く握ると一人目の男が大きく剣を振りかぶり切りかかるよりも早くまず、腕に軽く傷を付け怯んだ隙に右手の人差し指と中指に挟んであったナイフで首を殴るように突き刺し指を離す、次に左右から胴を切断しようとする剣をしゃがんで避け、飛び跳ねるように地を蹴り左側にいた男の胸を、左手で殴るようにしてナイフを刺す、右側から襲って来た男の左から右に胴を狙ってきた剣を軽く後ろに下がることで避け、そのままメートルほど下がり、今度は走りながら男の足下に残ったナイフを投擲し、後ろに避けながら右肩から左脇を狙って放たれた袈裟切りを右に回避し、すぐに脚を狙って来た斬撃の前に飛び込むようにしてかわしながら、手前に刺さっている先ほど投擲したナイフを拾い逆手にもち臍の辺りに差し、足下から一気に上に飛び上がりながら右手のナイフで顎の辺りまで切り裂く、更に右と左の目をナイフで一直線に切りつける

- ○ - ○ -

そのまま倒れ込む男の額に思いっきりナイフを差し込む、他に倒れていた男の額にナイフを刺し死んでいるか確認をする。

と、どうやらメルさん達の方も終わったようだ、メルさんがこちらに駆けてくる

「おい、アリス君大丈夫？怪我してない？」

と心配してくれた、正直楽勝ではあったが、あとあとめんどくさそうなので、

「大丈夫です、其方こそ大丈夫でしたか？」

と答える、するとどうやら依頼人と荷物の無事を確認してきたらしいジョセがやってきた、

「おつ坊主無事だったか、依頼人と荷物は無事だったぜ、しっかしお前以外と強いな」

と私が殺した男達を見ながらいった

確かにCランクとしては私としても強いと思う、だけど

「そうですか？私は三人しか倒してないですよ？五人ずつ倒したジョセさん達のほうがすごいですよ。」

そう、私はCランクとしては強い方だがBランクにはまだ及ばない、そんなことを考えている内に目的の三分の一くらいの所にある町に着いた、どうやら今日はここにある宿に泊まるらしい

部屋は、私とメルさんとカイトが一人部屋、依頼人とジョフが警護のため相部屋らしい小さな宿とはいえ一人部屋はうれしい、更に盗賊退治のお礼にと銀貨十枚（約一万円）をくれたので、町に買い物に出かけた、まず食べ物を買に行った別に食べなくても平気なのだが食べないと不審がられるからだし肉をいくつか買い今度は、裏道にある店を回ることにした。

## 裏市場で：

人々の喧噪が小さく聞こえる、此処は大通りの脇にある薄暗い裏通り、居るのはいかにも怪しい武器屋や薬屋、奴隷商人、そして今日の前にいる、この町に住んでいる不良の皆さん、

「おいこら、聞いと」んのかワレえあ、あ、？答えるよガキがあゝ」

あゝ何言つてんのか解らん、はつきり言ってお手上げです、理解できないです。

「おいっ！ーちびいい加減なんとか言えやコラア」

「あ、えつと何でしょうか？」

「何でしょうか？」じゃっねーよ！ーいい加減いてこまずぞほ、げえ」

あんまり五月蠅いから殴り飛ばしちゃった。

男は残念だけど気絶しちゃった、こいつに知り合いですと言っていただければ、歩きやすそうだったんですけど、

そう思いながらも裏通りを歩く、目的の施設まであと少し、というところでさっきの奴の仲間だろうか？いかにも不良という、男が前から四人ほど出てきた私が戦闘態勢に入ろうとしたとき、目的の施設から、一人の男が出てきたその男を見たたん不良達が慌てた。た。

1「おい、逃げる裏ギルドから出てきたってことは」

2「あっあいつAランクオーバーかよ」

1「勝てるわけねえよ」

3「は、はははは」

4「おいっ逃げるぞ」

1 2「ああ、」

3「あはっあっはははははあっ」

1 2 4「お前大丈夫かよ」

3「わりいな、いけねえや」

2「ど、どうしたんだよ!!」

3「腰が抜けてたてねえや」

1「ならおぶつていく!!」

3「やめろ!!そんなことしたらお前まで殺されちゃう!!」

1「そんなことは気にすんな、死んだら俺はその程度だったってことだ」

3「そんなこと気にすんなだど!?気にするに決まってるだろ」

1「お前」

3「俺のことは良い!!俺を置いて先にいけえええ!!!!」

4「くっ」

2「すまん」

1「ダチ公う」

「あの」

1「あゝあゝ?何だよ!!ダチとの別れくらいさせてくれよ!!」

「いや、全員で逃げてください、彼との話の邪魔ですから」

1「知り合いか?」

「ええ、そんなところです」

1234「わりいな」ノシ

「いえいえ」

不良達が立ち去るまで見ていると、

「お久しぶりです、ケビンさん」

「ひさしぶりですね、フォーレン国第零部隊、副隊長アリス様」

フォーレン国はこの大陸の西の端にある大国と言われている小国だ、国土は大きくはなく特別な鉱物がたくさんとれるわけでもない、フォーレン国が大国と言わせているのはその軍勢力で。

魔法兵5000人

歩兵15000人

騎士・聖騎士5000人

弓兵5000人

特殊兵隊1000人

偵察隊2000にんである

基本的に歩兵1500人弓兵500人魔法兵500人の2500人で1部隊であるが特殊と騎士団はそれぞれ1000人で1部隊であるまた、第四>第三>第二>第一と数下がるごとに一人一人の強さがあがっていき、混合、騎士・聖騎士、特殊の第一部隊なら三日で国を落とせると言われている、

混合10、騎士5、特殊が1部隊と言われている

が実は混合には加えて1部隊ある、それが第零部隊であるその存在を知っているのは、王族と一部の人間だけである所属しているのはたったの20人でいどだが一人一人が、固有の能力を持っている。

「まったく、貴女此处で何をしてるんですか？貴女と隊長が居ないから結構探したんですよ？」

とケビンが軽く眉を寄せておどけたように言った。

「そうなんですか？すいませんご主人様にたまには、外の世界も見えておいでっていわれたので…戻った方が良いですか？」

「いや、別に構いませんよ？目の前でいちゃつかれてると殺意が沸くだけです…所でリミッター自分でかけたんですか？」

「えっ？魔力抑えられてないですか？」

「いいえ、貴女の魔力が感じられなかったの…所で、こんなところで何してるんですか？」

「せっかくなのでこっちの（裏の）ギルドにも、入っておこうかと思っただんですが…だめですか？」

「依頼内容が暗殺などになりますますが表と変わりませんよ？」

「そうなんですか？」

「そうですよ」

「じゃあやつぱりいいです」

「それではまた」

「はい」

そう言っ て私はケビンと別れて宿に戻りました

## V Sワイバーン

裏通りから出てきたアリスが宿に戻る頃には日が傾いていた、夕食の用意が出来たようなので食堂に向かうと、流石に王侯貴族のと同じようなご馳走というわけではないが、それなりに豪華な食事が用意されていた、気が付かなかったが依頼人の商人は最近拡大の一途を突き進んでいる『ライン商会』の人のようだ。

それなりに豪華な食事を終えた後明日からどうするか話し合った、実は今回の荷物は『ライン商会』にとって、今後を左右する重要な物らしい、しかし、何処から情報が漏れたようで今この辺りに盗賊が集まっているらしい、このままでは明後日までに荷物を運べないらしい

「困りましたね、明後日までに運べなければ私や首ですよ」

依頼人が弱音を吐くと、ジョセが待ったをかけた。

「諦めるのは早いかもしれないですよ」

「ホッ本当か？」

依頼人が聞き返す

「ええ、方法は、あります」

「どうするの？」

私も気になったので訪ねてみた

「実はこの道目的地まで大きく迂回しているんですよ、まっすぐ行くと魔物が大量にでる魔物が原に出してしまうので、」

「それじゃダメではないか、ああ、やっぱり俺なんかダメなんだ、職も失い、家族にも見捨てられ一人寂しく野垂れ死ぬんだ」

と依頼人が嘆く

がジョセは自信たっぷりと言おうとした瞬間横からカイトが

「わかった今は盗賊共が集まっているから喰いに行つて、魔物が居ないかもしれないってことか」

と大声を上げる

見ればジョセの目が点になっている、何が起ったのか解らないという顔だ。

だが依頼人はジョセのことなど気にせずに

「やった、家族に捨てられないで済む」

と喜んでいる。

「明日はやくに出るぞ!!」と依頼人が言い放心しているジョセを置いて、その日は解散した。

―翌日―

「さあ行きますかっ」

依頼人が張り切っている今日は魔物が原を突っ切って、一気に目的地を目指す。

「気合い入れてきなさいよ!!」

「「おう」」

ジョセもアレから回復したようだ。

町を出て一時間位がたったころ魔物が原の真ん中くらいに着いた、やはり読み通り盗賊の方に向かっていったようだ、だが魔物が原を抜ける直前にそれは居た、

腹以外は堅い鱗に覆われ腹には分厚い皮、背にはコウモリのような羽と合体した腕、指の先には鋭い爪があり口からは、約八百度のブレスを吐く魔物の中で最強を誇るドラゴンの亜種であり、亜種の中では比較的に弱い、しかし兵士が百人がかりで戦って、ようやく勝てるほどの力を持つワイバーン――恐らくはこの魔物が原の主であろう――がソコに君臨していた。

「ひっ、ひいいい!!」

「う、そ………しょ?」「ありえん!!ありえんぞおお!!」

「マジかよ!!」

みんな驚いて固まっている、私は良く解ないのでよく見つめてみる、確かに強そうだとは思っけけど……

「とかげ 蜥蜴さん?」

そう、蜥蜴にしか見えない 顔は怖いけど可愛いと思う。「蜥蜴!

「?あんなのと蜥蜴と一緒にすんなよ!!!」

すばらしい速度でカイトさんに突っ込まれました。

「あなた達!!!何を呑気に漫才してるの!!!?逃げるわよ!!!」

「そうだ、速く逃げないときずかれ」

ジョセさんが「るぞ!!!」と言う前にワイバーンにきずかれたようです、こつち見ないで下さい、怖いです。

「グガアアア」

ワイバーンが口を大きく開き、ブレスを放ってきます。狙いが上手く定まっていなかったからか、私たちよりも、だいぶ後方に当たりました、が当たった場所は、岩も草も砂も関係なく焼け焦げてしまっています。私は兎も角、他の人は当たったら一瞬で、ステーキです。

「うわぁ熱そうですね」 「本当だなっっじゃねっよ!?!どうすんだよ?」

「困ったわね」

「逃げよう物にもブレスがな」

「ああ、やっぱり私は家族に」

「くそっ!!!此処までかよ!?!」

「...あのっ」

「どうした?」

「...私が足止めしましょうか?」

「...出来るのか?」

「えっと、逃げ回るだけなら...」

「たの「まった」んだ?」

「ジョセさん?どうしたんですか?」

「...正気か?」

「何がですか?」

「死ぬかもしれないんだぞ?」

「それは依頼を受けてから、ずっとですよ?」

「しかしお前だけを危険な目に遭わせるわけには...」

「だいじょうぶですって!!」

「いやっ、だが……!!俺もの「残らないで下さいよ!?!」こる??」

「どうせ、狙われるのが一人なら、狙われていない方が邪魔になる心配も、なくなりますから」

「わかった……生きて、戻れよ」

「はいっ、それでは速く逃げて下さい、」

そう言うてワイバーンに切りつける。私対ワイバーン、開始です

「さて、カイトさん達はもう町に着きましたかね」

そう言いながら、私はもう何度目か解らないワイバーンのブレスを避ける。

「そろそろですか」

ワイバーンの相手も疲れてきたので逃げることにする、別に倒しても良いのだけれど後々、大変そうなのでやめておく。

「……にしても、何処まで追いかけてくるんですか!?!」

そう、アレからどのくらい逃げただろうか、距離にして3キロほど逃げたはずなのだがワイバーンは、未だに追ってきます。

「ふう、しょうがないですね」

仕方がないので倒すことにした、ワイバーンは強敵とされているが実は重大な弱点がある。

それは『ブレス』を撃つ瞬間だ、ドラゴンや中級以上のワイバーンならば話は別だが下級のワイバーンは、魔力の扱いがあまり上手では無いのだ、なのでブレスの溜の瞬間に口の中を攻撃されると暴発させて自滅してしまう、とは言っても発射する一秒にしないにしない、ではならないのであまり成功例もなく、知られてはいない、

「ふう、久しぶりに本気でやりますか」

私はそう言いながら懐からナイフを取り出し人差し指と中指に挟む、

私が止まったのを好機と見たのかワイバーンがブレスの溜に入る、魔力が口に溜まり密度を急激に増してゆく

「やっ」

掛け声と共に私は腕を音速で振ってナイフを投擲する、腕に激痛が走りぼろぼろになるがすぐに元どおりに治る

ナイフは狙い変わらずワイバーンのブレスに突き刺さり『ボンッ』と言う爆発音と共にワイバーンの頭が吹き飛ぶ、後にはビチャビチャという、脳みそが飛び散り岩や大地にぶつかり跳ね返った音と、『ドサッ』という鈍い音をさせて倒れるワイバーンの姿がある、私は体にワイバーンの脳みそや血が付いていないか、確かめながら町に向かいました。

## 依頼完了

私が町につく頃にはすっかり夜になってしまいました。

「ふう、やっと着きました。早くギルドに行かないと」

もう宿に泊まりたかったのですが、そのお金がなかったのでギルドに向かいました。

「――！アリス」

「うわっ！？メルさん？」

私がギルドにはいると、依頼人さんとメルさん達がギルド内にある酒場のような所にいました、どうやら私が来るのを待っていていたみたいです。

「アリスちゃん大丈夫だった？怪我してない？」

「大丈夫ですよ」

「ちよっマジかよ」

「ワイバーン相手だぞ！？逃げるだけでも命がけだというのに……」

「ふっ二人とも――！アリスちゃんになんてこと言うの！？」

「まっまあまあ皆さん、私は無事だったんだし良いじゃないですか！ねえ依頼人さん？」

「うっ、うっ……アリスざっ……よっ……よがっだ……うっ……うっく」

「いつ依頼人さん！？」

「あーもー湿っばいなあ！おいジョセフ何とか言ってやったらどうだ――！」

「あーそうだな、アリスとりあえず報酬受付で貰ってこい、依頼人は何とかしとくから」

「は、はい行ってきます」正直もう疲れたので私は素直に受付に行った。

「あのっ」

「はい、どうしたんですか？」

「依頼の報酬をいただきたいんですけど」「はい、報酬ですね、でわギル輪を出して下さい」

「はい、どうぞ」

「え、でわアリスさんで間違いありませんか？」

「はい」

「Ｃランク依頼お疲れさまでした、こちら報酬の銀貨一枚です」

「ありがとうございます」「ではまたのご利用をお待ちしております」報酬を受け取って皆さんの所に行くと、一応皆さん落ち着いたみたいで、カイトさんが

「さつきは、悪かったな」と皆さんを代表して謝ってきました、別に悪くは無いんですけどね。

でも此処で謝らなくても良いと言っても聞いてくれそうもないので、「いいですよ」

とだけ言っておいた。

その後はまた下らない事をいろいろと話して別れた。依頼が終わってもう逢うこともないのだろう、少し寂しいが何時までも一緒にいたら私の正体がバレるかもしれない、そう思いつ宿を探しに行く途中変な男がいた、ボサボサの汚れきつた髪をしていて顎には無精髭が生えている、年は四十くらいそんな男がいた。

私とその男の隣を通り過ぎようとすると

「ソコの若いの、少し話を聞いていかないか？金はいららないから」と言ってきた、別に無視しても良いのだが目がすごく真剣に思えたので

「どんな話なんです？」

と返す

男は無視されなかったことに安堵したような顔をして、

「いや何昔話だよと言ひ話し始めた」

## 昔話（前書き）

少しアレな所（R - 5くらい）があります

## 昔話

昔々この世界を創った神様がいました、しかし神様は傍若無人で周りに迷惑をかけ続けました。

ある時は神様の前を虫が通り過ぎただけでその虫を滅ぼしました。

またあるときは動物の親子で殺し合いをさせました。

神様は傲慢で天使達に仕事は任せ、一人遊びふけていました。

しかしある日そんな神様は遂にある天使により殺されてしまいました、そしてその天使は神様の代わりに世界を平和に治め始めました。しかし人間達は何時まで自分勝手に我が儘でした。

そしてある時天使は遂に命令を下しました。

『人間達を滅ぼせ』と

それに慌てたのは人間達です、ついには誰が悪いのかで戦争を始める始末です。

そんなときです。

神となった天使が地上に降り立ったのは。彼は人間達の愚かさを嘆きました、自分さえ助かるのなら他人はどうなっても良いと、友を時には家族でさえ簡単に見捨て、彼は多少の愚かさならば救えるかと救おうと考えていた、しかしこの現状を見て彼が人間を全て滅ぼすと人の王共に告げに行く途中子供達に虐められている10才くらいの少女を彼は見つけた、汚れてはいるが大きな瞳が印象的な愛らしい顔、白く透き通るような肌、人間界では異端とされている腰の辺りまである黒髪、そして彼ほどではないものの人でありながら密度、量どちらも天使に引けを取らない魔力、彼女の潤んだ瞳と目があったとき彼の体に電流が走った。彼は生まれて初めて恋を知った、一目惚れだった……、彼女もこれまでに見たことのないほど美しい彼の容姿に一目惚れしてしまったようで顔を赤く火照らせた。彼もそれを見てうつすらと顔を赤らめ彼女を虐めていた子供達に歩み寄ると声をかけた、

「何をしている？」

すると子供達の中で一番大柄な少年が――多分子供達のリーダーであるうー５才くらい――が答えた

「だれだよ、てめえ」

「ああ、ごめんごめん僕は今王様に会いに行く途中の商人だよ」

「へーにいちやん商人か」「そうだよ、で君たちは何をしてるの？」

「ん？ああ、これ虐めて遊んでんの、にいちやんも遊ぶ？楽しいよ  
これ、あー！それとも買ってく？まだ誰も手え出してないはずだよ？」

すると子供達が一斉に笑い出す

「……いくらだ？」

「え？にいちやんマジで買うの？にいちやんも、物好きだねーよく  
こんな髪的女買うよ」

「いくらだー！」

「ちよっ！怒んなよー！あー金貨１０枚でどう？ふつうの奴隷の  
半額だけど」

「これで良い？」

「うおっすげえマジで売れたよー！」

彼が投げ捨てるように渡した金貨に彼らは大声ではしゃいでいます、  
彼はそのうちに渡された彼女の首に着いている首輪とつながった紐  
をもって、彼のとった宿へ戻りました。

「あのっ」

「ん？」

少女と彼は今、彼がとった宿にいます。

「なに？」

「そっ、その……」

「どうした？」

「あ、あのですねー」

「うん？」

「え〜っと」

「とりあえず風呂入ろっか」

「おっお風呂ですか？」／／

「うん」

「わ、わかりましたっ」

「風呂場」

「あの〜」

「ワシャワシャ」

「ん〜？」

「ワシャワシャ」

「脱がないんですか？」

「ゴシゴシ」

「見たいの？」

「ゴシゴシ」

「そっそんなこと」

「ザバー」

「ふうごめんごめん、洗い終わったよ。」

「ありがとうございます」

「何時までも入らないけど、恥ずかしくないの？」

「へ？」

「風呂」

「うえ？って、きゃー」

「ははっやっぱり可愛いな」

「へ？か、可愛いですか？私が？」

「うん、やっぱり惚けた顔も可愛い」

「本当っ……ですか？私、髪の色おかしいですよ？」

「きれいな黒だと思うよ？可笑しくなんかないと思うけど……」

「可笑しいですよ！！他の人は綺麗な金髪とかなのに、私は悪魔みたいな『黒』なんですよ！！」

「でも、君は悪魔じゃない、女の子だろ？」

「へ？……あ、あぐうう……ふっ……ふぐうっ」

「ごめんっ！！何か酷いこと行っちゃった？謝るから泣かないで！！」

「ひぐっ、ち……違うんです。ご主人様は悪くないです。私……お母さんにもお父さんにも悪魔って、人じゃないって……ずっと言われて……町のみんなにも虐められてて」

「……そっか」

（きゅっ）

「ふえ！？ご……しゅじん……さま？」

「大丈夫、僕は……君に酷いことしないよ……君に酷いことする奴から守ってあげる」

「どうして？……どうして私に優しくしてくれるんですか？」

「うん……君のことが大好きだから……かな？」

「え？それって……どういうこと……ですか？」

「……一目惚れだよ」

「一目惚れ？」

「ああそつだよ、恥ずかしいからそつ何度も言わないでくれ……」

「……です」

「ん？」

「私も、私も好きですっ！！……は……初めて見たときからずっと……ずっと好きでしたっ！！」

「本当？僕が天使でも？」

「へっ天使……ですか？」

「そう、天使……それでも好き？」

「はっ……はいっ好きです、愛していますご主人様」

「ふふっありがとう……決めたよ」

「へっ？」

く王宮く

彼がつく頃には既に全ての国の王が広間に集まっていた。

「ようこそいらっしやいました、天使殿」

「ああ……早速だがここ人間界を滅ぼそうと思う」

「それは我らと戦争をするか？」

「正気か？」

「いくら天使とて、人間と戦争をして無傷で勝てると？」

「ふんつまあ最後まで聞け、滅ぼそうと思ったが気が変わった」

「良かった……」

「それでは戦争をする気はないと？」

「ああ……だが一つ条件がある、」

「……条件？」

「なんだ？それは？」

「連れてきて」

ガラガラ・

「この少女が欲しい」

「この悪魔か？」

「なにをたくらんでいる？」「……だめですか？」

「いや、良い」

「わかった」

「ふふっただで、とは言わん」

「ほう」

「魔法の使い方を教えてやろう」

「本当か？」

「ああ、人間達と戦争しようにも魔法も使えなければ、相手にもならんからな」

これが元で人間界に魔法が伝わったそうです。

「天界」

「ご主人様」

「何？」

「名前……」

「名前？」

「そう、名前、私に付けて下さい」

「うんそうだな……アリス」

「アリス？ですか？」

「うん、そうだよ。今日から君の名前はアリスだ」

「ご主人様、嬉しいです。ありがとうございます」  
ちゅっ

「なつなな何するんですか！！ご主人様！？」

「ごめん、嫌だった？」

「嫌じゃないです！！好きな人にキスされて嫌なわけ無いじゃないですか！！！！」

「本当？」

「本当です！！！！」

「じゃあ」

「ふっ……うむっ……ちゅ……んっ……んん！！ゴクッ……んはっはっ  
はあ……ふう」

「大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃないです！！なんですか途中で入れたの？飲んじ  
やっただじゃないですか！！」

「ああ、アレね……アレはね『天使のかげら』だよ」  
「？」

「え」とね……ああ、こう言えば解りやすいか、アレはね僕の魂の  
一部だよ」

「た、魂ですか？」

「そっだよ」

「魂なんてご主人様大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないよ」

「……………ぐすっ」

「アリス？」

「ごっごめ…なさっ…わた…私のせいで…ご主人様が…死んじゃ」

「死なないよ」

「へ？死んじゃはないんですか？」

「君から深い方のキスし…むっ…ちゅ…ぷはっ…君以外と大胆？」

「ちぢ違いますよっ」

「ふふっこれで永遠に一緒だね」

「永遠…ですか？」

「あれっ聞いたこと無い？天使の魂を飲むと不老不死になれるって伝説」

「知ってますけど…ホントなんですか？」

「本当だよ、あつそれと今からある国に行くから」

「国ですか？天界じゃなくて…？」

「ははっ天界はね…実は人間界とつながってるんだよ、ちょうどそこにある国があつてね、僕は今はその国の特殊部隊にいるんだ」

「そっなんですか？」

「そっだよ、君も入るかい？」

「私も入って良いんですか？」

「うんいいよ…死なないからね」

「やった〜ご主人様と一緒にですね〜」

今からずうっと昔のお話です

……………こうしてこの世界に魔法というものが出来たと言われています。

## 昔話（後書き）

感想など頂けたら嬉しいです。

拙い文ですが此処まで読んでいただきありがとうございます。  
良く解らないと所があれば教えて下さい

## 何やってるの？と新たな動き（前書き）

設定としては文明は中世のヨーロッパくらいです。  
戦争はしょっちゅうです。

作者は戦争が好きだ！！

作者は戦争が好きだ！！

作者は（ry

→ネタです。

「不謹慎だ」とかいつていじめんといってください。  
ヘタレですみません

m ( ( m

## 何やってるの？と新たな動き

……と言う事があったそうです」

「……ケビンさん？何言ってるんですか？」

「な、なにをつわ、わわ私はケビンなどでは無いですよ、副隊長」

「副隊長って、言っている時点でバレてますよ」

「はぁバレちまいやしたか……何時からおきずきで？」

「ご主人様との、出合いの辺り……ですかね」

「そうっすか……！！そうでした忘れてました。」

「どうしたんですか？」

「いや、忘れてたよそう言えば俺、伝言と渡すもんがありましたっけ」

「なんですか？」

「ンじゃ、まず伝言っすね」

「どちら様からですか？」

「ふっふっふっふっ、どちらも、貴女の大好きなご主人様ですよ」

「！！本当ですか！？」

「ええ、本当ですよ。まず伝言は、『どう？元気にしてる？……ああそっだ！そっちでの魔法の基準をケビンに教わると良い』……だそうですがどうしますかい？」

「えーと、お願いします」

「解りやした、んじゃまた後で、でプレゼントの方なんスけど」

「はい？」

「どうぞっす」

といいながらケビンが何処からともなく大剣を取り出す、があまりの重さに落としそうになる。それもそうだろう、幅は40センチ長さはアリスよりも60センチほど長い二メートルほどもあったからだ、

「うわぁ、おっきいですね」

しかしアリスは簡単に持ち上げる

「しかし、相変わらざる馬鹿力っスね」

「馬鹿力じゃないですよ、なんか私が持つと軽くなるみたいです」

「ああ、便利ッスね」

「所で魔法見せてくれるんじゃないんですか？」

「ああ！！そうでしたそうでした！すっかり忘れてたッス」

「もう！！頼みますよ」

「あい解りました、まず魔法に必要なのはイメージってことはこちらも同じっす、例えば『ファイア』」

ケビンが『ファイア』と唱えたとたんケビンを中心に火の粉が飛び散る。「ですがただイメージするだけなら」「今みたいに目標が定まりにくい、ですよね」

「流石っすね、だから人間は自分がよりイメージしやすいように、一人一人違う詠唱をとえるんすよ、例えば『赤き火よ、我に従い焼き尽くせファイア』」

今度は先程のように炎がまき散らされる事もなく、丸い10センチ位の玉となって近くに生えていた木にぶつかる、木はバキバキという音を立てて倒れる。

「こうなりやす、まあふつ々の魔術師ならこんなもんすね」「へっそうなんですか！って向こうと変わらないですね。こっちには無詠唱で魔法使える人いるんですか？」

「ええ、一樣いますが数はあまりいないはずですよ」

「じゃあなるべく詠唱した方が良いでしょう？」

「そう言うことッスそれじゃ」

「待って下さい！！」

「どうしやした？」

「えっと…その…さっき倒しちゃった木いちょう街路樹なんですけど…どうしましょう」

「あゝあ、忘れてましたわ、まあ逃げましょう、逃げるが勝ちっす」「わかりました」

「そいじゃっ」

「ありがとうございました」

その後アリスはギルドに向かって大剣を背負って行きました。

―ギルド（内の酒場）―

「おいおい聞いたか？」「何が？」

「なんでも近々、隣国の『グラバー二帝国』がここ『フォレス王国』に攻めてくるらしいぜ」

「マジかよー！」

「マジらしい…」

「あのっ」

「誰だい？僕ちゃん」

「すいません、名乗るのが遅れました。アリスと言います、それで私実は此方に來たばかりなんですよ。詳しく説明してくれませんか？」

「いいぜアリス、まずグラバー二帝国つてのは軍事国家だ、人口や  
く9000万人歩兵200万人、魔法使い10万人、騎士1万人だ。  
王都の近くにグラバー二鉱山てのが有るんだがな、良い鉄が取れる  
そうだぜ」

「んで、此処フォレス王国は商業国家だ、人口約5000万人、歩  
兵100万人、魔法使い1万人、騎士2人更に海兵10万人だ、ま  
あグラバー二帝国には海はねえし陸続きだから、海兵は歩兵と変わ  
らんな」

「へーそうなんですか」

「そうだアリス、騎士つてのはな、大きく分けて四種類に分かれる  
って知ってるか？」

「騎士さんって一つじゃないんですか？」

「んにや違うぜ、まずその騎士が魔法で戦うか剣で戦うかによって  
二つに別れる、別れた中でも貴族騎士と平民騎士都に別れるんだ」

「貴族騎士ってえのはその名の通り貴族やその息子の事を言うんだ

ぜ、つええ奴あ化け物だ、まあただはいっているだけのプライドだけが以上に高い馬鹿息子とかもいるがな」

「だが平民騎士は平民の騎士のことだが、何処の国でも同じ基準があつてなあ、その国の平均的な強さの兵士10人を一度に相手して勝たないといけねえんだ」

「平民騎士さん達はエリートさんなんですね」

「ああ、平民騎士は全員が強いな、ギルドのランクで言うと団長、副団長などの特別強い以外でもBクラスくらいは有るはずだな」

「おじさん達はどうするんですか？傭兵として冒険者を集めてるんですよね？」

「ああ、俺らは行こうと思う、こう見えても俺たちB+なんだぜ！」

「…？+ですか？」

「ああ、知らなかったのか？C以上はなあ更に細かく強さを測るためにIと+そして何もなかったのBなどがあるんだ」

「ランクで高い順に言つと『B + < B < B -』だな」

「いろいろとありがとうございました」

「アリスはどうする？行くか？」

「えっと…」

「止めるよ、坊主はまだ若いんだ行つても、死なせるだけだぞ」

「…そうだな、悪かつたなアリス」

「あついえ、良いんですよ」

そう言つて私はギルドから出ました。



メ  
タ  
ポ

「どうでしょう」とその答え

（宿屋）

「……戦争……ですか」

ギルドで聞いた戦争について考えていたらつい、口に出してしまいました。

正直、私の今の魔力は1000位魔法使いとしては、大体平均が1500位なので少し少ないくらいだ、因みに私の魔力は、

第十リミッターを解放すると、2000位

第九リミッターまで解放すると、3000位

第八リミッターまで解放すると、4000くらい

第七リミッターまで解放すると、5000位

第六リミッターまで解放すると、6000くらい

第五リミッターまで解放すると、7000位

第四リミッターまで解放すると、8000位

第三リミッターまで解放すると、9000位

第二リミッターまで解放すると、10000位

第一リミッターまで解放すると、約10000兆位

となります、

第二までならば解放（外して）もあり得なくはないので良いのですが、残念ながら私の容姿のせいで怪しまれるかもしれないので無しです。

格闘は戦えないこともないのですが苦手です。オーク六体くらいが限界です。戦場なんて相手が多すぎです、死んじゃいます……………まあ死なないんですけどね。

でも痛いのは嫌です、それに後々めんどくさそうです。

「なら、見に行くかい？」突然、私の後ろから声がした。

「どうしたんだい？アリス」

たった数日、逢わなかっただけなのにとっても懐かしく感じる

「ご主人様！！」

「おっと！嬉しいね君から抱きついてきてくれるなんて私の旦那様（夫）の声」

「ごっごめんアリス、なにか悪いことした？」

「スッ…う…うんズッ…して…グスッ…ないです」

「じゃあ、何で泣いてるの？」

「ひ、久しぶりに会えてグスッうれっ嬉かったから」

「チュッ可愛いなアリスは」

「ごっご主人様！？」

「あっあの～お二人さん？」

「ケツケビン！？なっとな何でいるの？いつから？」

「いや、えっとその～」

「もうっ邪魔しないで下さい！！」

「そうだぞケビン、僕らの邪魔をしないでくれ」

「って隊長が連れてきたんじゃないツスカ！！」

「あっ人のせいにしました～いけない人です」

「ふっ副隊長までっ！！俺で遊ばないで下さいよ！！」

ケビンが泣きそうな声で言うので、飽きてきたし止めてあげた。

「僕“等”は戦争を見に行くけど一緒に行くかい？」

「いつ行きます！！行きたいです！！行かせて下さい！！」

「じゃあ一緒に行こうか」

「はいっ…でも何処で戦争するか解るんですか？」

「ああ、それなら大丈夫だよ、こっちの戦争は変わってて」「両国で話し合って場所を決めて、そこで戦うんすよ」

「そうなんですか？でもどうしてですか？」

「民への配慮だよ、どさくさに紛れて泥棒したりする奴がいるし、第一畑が荒れるからね。」

「へ～そうなんですか」

「三日後らしいからそれまで一緒に買い物でもするかい？」

「はいっ」

「ケビン」

「なんスか隊長？」

「お前に少し暇をやるから、娼館にでも行ってていいぞ」

「まマジっすか？」

「ああ、本当だ」

「イヤったゝこれで『サクランボのケビン』の汚名を返上できる！  
！」

「良かったねゝケビン」

「良かったな」

「はいっありがとうございます！！！！あっじゃあ行って来ますね」  
ケビンはものすごい早さで駆けていった

「じゃあ僕達も行こうか」

## お買い物と新たな武器

「市場」

「へえ、商業の町と言われてるだけあって、いろんな物を売ってますね」

「そうだね、アリス何か欲しいものある？」

「欲しいものですか？」

「そう、欲しいもの、何でも言っていーよ」

「チュウが良いです！ー」

「チュウ？」

「そうですチュウです！ー私にチュウして下さい！ー」

「別に良いけど……此処で？」

「はい！ー今が良いです！ー」  
「今……ねえ」

（どう考えても周りから見たらロリコン野郎なんだけど……）

「まあいいや……チュ」

「つ……！つ……／／／」

「自分から頼んでおいてそんなに照れなくても……」

「あうつごめんなさい」

「別にいいよ……何が欲しいの？宝石？」

「いえ……あのつ剣が……剣が欲しいです！ー」

「この前送った大剣じゃダメなの？」

「良いんですが……その……大きすぎて目立つちゃうんです」

「あーそうか……ごめんじゃあ何が良いの？バリスト？」

「大きいじゃないですか！ー……ライフルがいいです……」

「ライフルか……こつちじゃ売ってなさそうだね」

「そうですか……ごめんなさい」

「ん？別に僕が作るから良いよ、とりあえず宿に戻ろうか」

「ご主人様の手作りですか！？」

「うん、そうだよ」楽しみにしてね」

「宿屋」

「よしっ作るか!!」

私の新しい武器を作るために宿に戻ってきました。

「早速作るけど、アリス色は何色が良い？」

「黒っ!!黒が良いです!!」

「解ったよ、じゃあ少し離れててね」

そう言ってご主人様が少しずつ魔力を解放・一ヶ所に集め始める。集められた魔力は湯気のように揺れている、空気のような透明な色から密度が高くなるに連れて黒く色が変わり段々とライフルの形となつてゆく、「ほら出来たよ、形はこれで良いかな？」

「はいっありがとうございます」

「弾は魔力だから弾の大きさは約2センチだよ…あとスコープの遠近はこのネジみたいなのだから、自分で調節してね……ああ、それからこのネジはね少し使い難いけどネジの中にある魔力によって右に二つ、左に一つ回るんだ、因みに右に回すには魔力を加えて、左に回すなら中の魔力を抜けばいいよ、あと右に一つで散弾銃みたいに弾が拡散するし二つで高密度の魔力を放出し続けるから剣みたいに使えるよ、今のままだとふつうに弾を撃つだけだよ、最後に左に回すと僕特製の特別な実弾が五発だけ入ってるよ……ごめん説明が長くなっちゃったね」

「いえ、ありがとうございます、ご主人様」

「いや別に良いよ、それよりも明日早く発つから早く寝ておいた方が良いよ」

「解りました、おやすみなさい」

そう言って私は自分のベッドに入り眠りに着きました。

「翌日」

「じゃあ行こうか」

「あの…ご主人様？」  
「なあに？」  
「ケビンさんのこと忘れてませんか？」  
「…あーはいはい忘れてた」  
「何してるんでしょうね」  
「オーイ」  
「あっ来ましたよ、ご主人様っ」  
「ハアハア…すみません…ツスハアハア…ゲホッ…ゴホ」  
「まあ落ち着け…どうだった？」  
「いえ…その…」  
「ん？どうした？」  
「間違えて男娼買っちゃったツス…チクシヨ」  
「またかよ…お前実はホモだろ」  
「違うつすよ！！大体あんたも童貞じゃないツスカ」  
「いや、童貞じゃないし」  
「聞きました奥さん（アリス）貴女の旦那さん浮気してますよ」  
「え？ご主人様私以外にも手を出したんですか？」  
「出してないけど？」  
「…は？隊長マジっすか？」  
「本当だけど…ねえアリス？」  
「はい」  
「副隊長意味分かってます？」  
「えっと…例えば私の○× をご主人様の××○で      たり、私  
を○×で××ったりする事ですよね？」  
「…隊長」  
「何だ？」  
「何やってるんですか貴方は！！！」  
「良いじゃないか恋人だし」  
「いやっそれでも！！」  
「あのっそろそろ行きませんか？」

「そうだね行こうか」

ご主人様がそう言うのと私たちは、戦場予定地まで向かった、幸い魔物などに逢うことも無く無事に戦場予定地『ヒュグロス平原』に着きました。

「そう言えば明日か」

「そうツスね」

「あのっ」

「ん？どうしたのアリス」

「どうして目の前に敵がいるのに、酒盛りなんてしてるんですか？」

「アリスはこっちの戦争初めてか……こっちの戦争はね、決闘みたいに時間びつたり正々堂々とやり合おうってゆゝ決まりがあるんだよ……まあ戦闘中なら奇襲もアリだけどね」

「ふーんそうなんですか」

「そうツス、それに此処ヒュグロス平原は中央に湖があり周りは山に囲まれているツスからね、軍師の腕の見せ所ツスよ」

「アリス見える？あの大きな木の上から僕等は見学するから……行くよ」

「はい……あのどうしてあの木の上なんですか？」

「それはね、君は嫌かもしれないけど、君の銃のテストもするからだよ……嫌？」

「いえ、ご主人様の仰せの通りに」

## ヒュグロス戦争

「ちっやっぱりグラバー二軍の数が多いな」

「こっちの2倍程か」

と、傭兵であり冒険者であるライルとその相棒であるクロムがぼやいていると、16才位の少女が話しかけてきた。

「おい、オッサン達何弱気になってんだよ!!」

「ちよつと、アイル!？」

「何だよ、エミ」

「『何だよ』じゃないわよ!!何喧嘩売ってんの!？ばっかじゃないの?あんだ」

「……すいません二人がご迷惑を私は、エミリアと申します」

「んや、木にせんでいいよ俺はライルこっちは相棒の」

「クロムだ、よろしく」

「よろしくお願いします…もう二人ともいい加減にしてよ!!ほらっ自己紹介しなさいっ」

「俺はアイルだ、で、こっちの五月蠅いのがエリスだ後こっちのデカいのがザックだ」

「よろしく」

「ああ、所で君たちランクは？」

「Cだけど？」

「ほうその年でCか」

「最近のがきはつええな」

「だろ?俺らが居るから負ける何ざありえないぜ」

「アイル、確かに君らは強いだろうが油断は禁物だぞ」

「どうしてだ？」

「その年でCランクは確かに強いがな、それでもまだCランクなんだ、おまえ達より強いも居るはずだからな」

「それに人数的に一对多数になりやすいからな、後ろからグサリと

かやられなように、氣い付けろよ？」

「……はい（よ）……」

アイル達が元氣良く返事をしたとき

『ブオオオオおおお』

とホラ貝の音が響く、

「なっ何！？」

突然の事にエリスが素っ頓狂な声を出す。

「ああこりや開戦の笛だ」とクロムが答え

「ガキ共氣い抜くなよ？」

とライルが続けると

「へっ任せとけ！！」

「がつがんばります！」

「行くわよお！！！」

「ふう行くとするか」

と四人がバラバラに言葉を返す、と

「うおりゃあ」

と十人ほどの敵が切りかかってきた。

それをアイルとザックがそれぞれナックルと槍で受け流す。

「ちっガキ共以外とやるな」

敵の中でも僅かに鎧の装飾が立派な男が話しかけてくる、がアイルはそいつがこの十人の中の隊長だろうと問答無用で殴りかかる。が簡単に剣で受け止められる。

「ちっ」

「なかなかやるな剣が折れるかと思ったぞ」

そう言いながら隊長であろう男が切りかかるうとして、急いでしゃがむ。すると一瞬前まで彼がいた場所を氷の飛礫が通過した。「ちっ！外したか！！」

「つとお！？危ねえな！！！」

アイルが魔術師であろう、先程氷の飛礫を放ってきた男に軽口を叩くと、今度は左右から飛礫が襲ってくる。

「くっそ、卑怯だぞ!!」

と言いなから今度は前に転がるようにして飛礫を避けが。

「ふっ、卑怯だと? 坊主、解ってんのか? 此処は戦場なんだぜ? 卑怯もクソもあるか!!」

と言いなから隊長が襲いかかってきた。それを皮切りに他の兵士達もアイル、ザック、エリス、エミリア達に襲いかかってくる。

最初の内は善戦していたが、時間が発つに連れアイル達は追いつめられ囲まれてしまった。

「やってくれんじゃねえか」

アイルが隊長に向かってにらみつけながら言う、が特に気にした風でもなくアイル達が構えを取ろうとしたとき『ヒュッ』という音がしたと思った、刹那敵の一人が気を失ってドサツと音を立てながら倒れる、更に音が鳴る度に敵が気絶していく。

「ヤバかったな」

「ああ、俺も死ぬかと思った。」

「アイルは兎も角、ザックなら大丈夫だよ」

「ひっでえな」

「くっくっ!!?」

「全く四人だと思って油断しちゃったぜ」

アイル達が気絶したと思っていていた敵兵がどうやら気が付いていたようにうで囲まれていた。

「くっ、くそっ」

「か囲まれた! だと!」

「ひやはは今度こそグチャア」

「なっ!」

今度こそヤバいと思ったとき先程よりも甲高い音と共に、敵兵の頭に穴が空きその後血と脳みそが噴き出す。

「うっわ」

エミリアとエリスが目を背けていると次々と敵兵の頭や胸に穴が空いていき血を周りにまき散らしていく。

「味方……か？」

そう、あまりの出来事にアイルが呆然として言ったとき

「危ない……！」

アイルはエミリアに突き飛ばされた

アイルが突き飛ばされたとき、また甲高い空気を切り裂く音がした次にエミリアを見たとき、エミリアは倒れていた。

「なっエミリア！？どうしたんだよ……！」

「あいつよ……！」

エリスが指さした方を見ると500メートル程先にある木にいた、髪は肩ほどまである金髪、容姿性別は解らない

「くそがっ……！味方じゃないのかよ……！」

そう言いながらアイルがあいつ（アリス）に向かって走り出す。

「ちよっアイル！？どこ行くの？」

「うつさい……！あいつぶつたおしてやる……！」

「仕方がない俺も行く、エリスはエミーを頼む」

「解ったわ、まかせて……！」

そうこう言っている内に木よりも10メートル前位の位置に着く

「やい、てめえ」

――木の上――

アリスは木の上で適当に両軍を撃っていた。

「ふう疲れきました〜次は誰を……」

と言っている

「……！？あつ……！？あの人達いろいろ教えてくれた人です」  
見ると酒場でいろいろ聞いた人達アイルとクロムを見つけた。

「うわぁ囲まれてますね」

アリスは基本的に借りは作らない主義である

「別に、この人数なら少しフォレスを助けても良い……ですよね……？」  
そう呟きながら次々と弾を放ち囲んでいる敵を蹴散らす。

「ふう終わったです… もう一つだけ助けましょうか」

そう言つてアリスがスコープを覗くと、敵に囲まれている少年少女達（アイル達）が目に入った。

「あそこにしましょうか。」

そう言つてあまりシヨックを与えないように敵を気絶させる。

「……何してるんでしょう…」

せつかくアリスが助けたのに逃げるところかど突き合っている。

「そんなことしてたら起きちゃいますよ」

アリスが言つと案の定敵が起きた

「ふう言わんこつちや無いです。」

そう言つて今度は敵を殺す。

「ふうこれはお仕置きです」

そう言つて今度は先程より強くはない、内蔵の手前程まで程までしか行かない程度の弾をリーダーであるう、少年に向かって撃つ。

が弾は少年では無く少年をかばつた少女に当たる。

「……あれゝ可笑しいですねゝこの弾の速さ、結構なもの何ですけど… まあいいです」

そういつてまた射撃に戻っていると。

「やい、てめえ」

と声がする見ると10メートルほど離れた辺りに燃えるような赤髪と濃い青い髪の男が二人いた

「… なんですか？」

「てめえどつちの味方だ？ グラバーニか？ フォレスか？」

アイルが勢いよく問いかけると、アリスは少し困つたような、からかっているような顔で答える。

「別にどつちの味方でもないですよ」

アリスは事実を述べるがしかし、アイルは納得しない。

「ふざけんじゃねえ…… まあいいてめえが味方じゃねえんなら、ぶっ倒したって良いって事だからな……！」

そう言いながらアイルは右からザックは左から攻める

（確か二つ回すだったかな）

それにアリスはライフルの先に魔力を放出し剣のように槍のように振るって応戦する。

「なっこいつチビのくせになんて力だ!!」

「それに速い…強いな」

そう言いながらもアイルとザックも攻める、がどちらも軽くライフルのうしろと魔力の剣に受け流されてしまう。

「大したこと無いですね」

「うるせえよ」

「アイル!! 熱くなり過ぎるな!!!」

「わりい」

「……飽きました」

そう言つてアリスは一気に距離を取る。吹き飛ばそうかと一瞬だけリミッターを第二まではずし直ぐに掛け直す。

「なっなんだ今一瞬寒気がしたぞ」

「……」

寒気の原因が分かったのであろうザックは絶句している。

「おいザック? どうしたんだよ」

そう言つてアイルが一瞬目を背けた瞬間アリスは一気に逃げる

「ちっ見逃したか」

そう言つてアイルはザックに視線を戻す

「大丈夫か?」

「っああ大丈夫だ…後で話す、とりあえず戻るぞ」

「解った」

そう言つて二人は戦場に戻っていった。

〳〵戦場〳〵

「おいザック、どう言うことだ? 戦争が一時休戦だと!?!」

アイル達が戦場に戻ると戦闘が一時休戦となりグラバーニ・フォレス両軍の王が戦場の真ん中に建てられたテントで話し合っていた。

「わからん、それよりエミ―は無事なのか？」

ザックがそう答えたとき

「ザック―！アイル―！無事だった！？」

と言いながら、エリスが駆け寄ってきた。

「俺もザックも無事だ！！エリス、それよりもエミ―はどうなった？」

「大丈夫、ぎりぎり内蔵の手前までしか届かなかったみたい」

エリスが答え、急に大声を上げた。

「ああ~~~~っ！！！」

それに驚きザックが若干うわずった声で質問する。

「どつどつしたんだ？急に」

それにエミリアが答える。

「中でこれまでの事を説明して？」

## 戦いが終わって

くヒュグロス平野<sup>テント</sup>

此処は戦場、グラバー二とフォレスとの間に設置されたテント、その中にはグラバー二王とフォレス王更にその側近とライルにクロム、更にアイル達三人と気を取り戻したエミリアが居た。

「それで？本当にあの攻撃は貴殿等ではないというのか？」

まずグラバー二王が口を開く、とフォレス王が答える。

「いや決して我が軍ではない！！これは断言できる」

「ふむ…言っておくが此方でもないぞ？……所で貴殿等は？」

とグラバー二王が答え、フォレス王に問いかけた。

「彼らは先程の謎の攻撃の犯人と接触した畏れのある者達だ」

フォレス王がそう答えるとグラバー二王がライルに問いかける。

「それは本当か？」

その問いにライルは普段より若干、緊張して答える。

「はい、その通りです、あのとき俺は周りをグラバー二兵に囲まれていました。そのとき突然俺を囲んでいた兵が血飛沫を上げながら倒れたんです。味方からの援護かと思い、周りを見回しました……そしたら、突然隣にいた奴の頭が弾け飛んだんです……」

最後はその光景を思い出した様子で顔を青くする。

しかしグラバー二王は更に問いかける。

「そうか……君はそいつの顔を見なかったのか？」

しかしライルはただ黙ってくびを振る。

今度はグラバー二王がアイル達を一瞥するとフォレス王に尋ねた。

「ではこの若いのは？」

「それは……」

聞かれ答えようとしたフォレス王の横からアイルが割り込み答える。

「俺たち、犯人の顔見たぜ！！」

ふつつならば斬られてもおかしくはない言葉遣いだったが、あまり

の驚きに両王は凍り付いた。

「それは本当か……！」

多少手がかりを知っている、程度だと思っていたフォレス王は予想外のことに少し動揺したような声で聞きかえす。

「本当だよ」

とアイルは答え両王に、アイルが狙われたこと、エミリアがかばったこと、アイルとザックが追いかけたこと、途中で逃げられたことを話した。

「ふむ、そうか」

とフォレス王が呟く、

「所で犯人はどんな奴だったんだ？」

とグラバー二王がアイルに質問し始める

「たしか髪は肩くらいで背は140センチ位だったな見た目は十歳くらいだったな」

「ふむ、それで戦ったのか？」

「ああ、だけど逃げられちゃったな」

「ほうどんな武器だった？」

「たしか黒い船のオールみたいな筒だったな、良く解らん素材だった」

「ふむ、その筒の中に魔力を込めて発射していたのか」

「ああ、あと筒の先から魔力を剣みたいに放出してたな」

「なに？」

とグラバー二王だけでなく、先程まで質問を一つもしなかった。フォレス王まで声を荒げる。

更に、グラバー二帝国の魔術師団長とフォレス王国の魔術師団団長までもが、会話に加わる。

「それは本当か？」

と、まずはグラバー二魔術師団団長が訝しげに聞く。

「ああ、そうだけど？」

とアイルは答えた。

「信じられんな…」

と両軍の魔術師団団長は言った。



## 戦いの後に〜2（前書き）

書き方が微妙に変わります、話がメインになりました。  
基本的に会話が多くなるので人物が何をやっているかは創造に任せます。

悪魔でヒロイン（主人公）はアリスです。  
アイル達はライバル的な何かです。

すいませんm（――）m  
長くなりました。

## 戦いの後に〜2

グ魔長「信じられんな」

アイル「何でだ？」

フォ魔長「それはだな、高密度の魔力をずっと、その形に保たなければならぬからだ」

アイル「……？？ということだ」

フォ魔長「つまりですね、『半端じゃない魔力コントロール』が必要だって事です」

アイル「すげえな……ってことあ、犯人はどっかの国の秘密兵器かもしれない……って事か？」

グ魔長「そうですね……後はAランクオーバーの冒険者でしょう」

クロム「えっ！？Aランクオーバー！？おめえら良く生きてたなあ」

アイル「へっへっへっスゲエだろ」

ザック「いや……違うな」

エリス「違っって何が？」

ザック「まず、奴の指にギル輪が着いていた」

フオ王「ふむ、これで何処かの国の秘密兵器……と言う線は消えたな……」

グ王「だがならばAランク以上の冒険者か」

ザック「いえ、其れもないと思います」

エリス「なんで？ギル輪してたんでしょ？」

ザック「そうなんだが……ランクはCだったんだ……」

一同「!？」

グ王「そつ……其れは本当か？」

ザック「はい」

アイル「見間違いつてことは……？」

ザック「いや……其れはないと思う」

エリス「マジかよ……」

フオ王「……フオ魔長？どうしたのだ？急に黙りおつて……」

グ王「グ魔長もだ！！気持ちは分かるがそう落ち込むな」

フオ魔長「はい……すみませんあまりの驚きについ」

グ魔長「私もです、もしザック殿の言う通りなら相手は化け物です」

エリス「ば…化け物……ですか？」

グ魔長「はい、通常魔力というのは最大量から使った量が引かれます」

アイル「どういう意味だ？」

グ魔長「つまりですねえ……ギル輪を使い私の魔力を見て下さい」

そう言うトボツ、と言う音と共にグ魔長の手のひらに、10センチくらいの火の玉が浮かび上がる。

グ魔長「このようにギル輪を等してみれば解ると思いますが、今の私の魔力が500から490に減りましたよね？」

アイル「ああ減ってるぜ？でも奴とどんな関係が有るんだ？」グ魔長「大有りなんですよ、魔力は使くと最大量までゆっくりと回復します」

アイル「？其れがどうしたんだ？」

グ魔長「あなた方が言っていた魔力の剣ですが、有る程度魔力のある者なら誰でも出来ます」

フォ魔長「しかしこれは魔力を常時放出し続けるため、長時間使えないんです」

フォ王「なんと！？其れでは奴はすさまじい量の魔力を持っている

のか!？」

グ王「もしくは異常な速度で回復しているか………だな」

グ魔長「その両方の可能性もあるな」

フォ王「……話は変わるが君たち、我が軍に入る気はないか?もちろん独立の部隊としてだが………どうかনা?」

アイル「俺たちを軍にか!？」

フォ王「ああ、君たちの奴と戦ったと言う経験と、奴とやり合える強さ、を役立てて欲しい」

アイル「解りました!………ザック達も言いよな」

ザック「俺は構わん」

エリス「私も良いわ」

アイル「と言うことだ………宜しくな」

ニギツ

フォ王「ああ、頼んだぞ必要な物が有ればいつでも言ってくれ、出来る限り用意する」

ライル「んじゃ俺らはグラバー二に着かせてくれないかい?確かに大した情報は無いが俺らは知り合いがたくさんいる」

グ王「すまないな、気を使わせてしまつて」

ライル「いやいや」

その後、フォレスとグラバーニとの間で停戦協定が結ばれさらに、同盟が結ばれた。

報告します（前書き）

久しぶりです

読みにくくてすみません

## 報告します

アリス「くくとなるようです、ご主人様」

ご主人様「ふふっ、アイル…だっけ？を生かしたのはわざと？」

アリス「ごめんなさい、最近暇そうでしたので」アワアワ

ご主人様「ありがと、アリスは良い子だね」ナデナデ

アリス「ふにい（喜）」

ご主人様「喜んでるの？アリス」

アリス「はいっ！アリスはご主人様に触れていただけで幸せです」テレリ

ご主人様「くく…！！あゝもう、可愛いなあ」ナデナデ

アリス「あうっあゝ」テレテレ

ご主人様「ねえアリス、目を瞑っておでこ貸してごらん」

アリス「？」ついー

ご主人様「チュッ」

アリス「えっ！？あっあえ？ご主人様？」

カー

ご主人様「アリス…」ジー

アリス「ご主人様…」ジー

ご主人様「……ごめん、我慢できないよ」スルッ

アリス「謝らなくて良いんですよ？アリスはたった一つご主人様への愛以外、身も心も魂でさえも貴方様の物ですから」

ケビン「あのーおっお二人さん？い、いいいったいなんな何をするおつもりで…？」アセアセ

ご主人様「ナニってナニだけど？」

ケビン「ちよっ！？ちよっと、なな何を言ってるんスカ！？」オロオロ

アリス「別に好きなんだから良いじゃないですか？」ムスッ

ご主人様「まあまあアリス、サクランボには少し刺激が強かったんだよ」

ゴンッ

ケビン「メソッ…メッソメソメソ…どうしてッスカグシュン………何でメゴメゴ童貞捨てられっ」グスグス

ご主人様「フウ、いい加減泣きやめよ、ケビン」

アリス「そうですよ、いい加減泣きやんで下さいよ！！虫野郎さん！！！！」

ケビン「ひっ酷い！！酷すぎるっスよ！！！！」

アリス「酷くないです、私とご主人様の邪魔をした報いです！！！！」

ご主人様「まあまあ二人とも……………で？ケビンどうするの？」

ケビン「そうッスね、まず副隊長、どうするっスか？」

ご主人様「渡さんぞ！！」ギョッ

ケビン「そうじゃなくて今、狙われてるんですよ？」

ご主人様「ほう、俺以外の男にか？」コキコキ

ケビン「いやっそうじゃ無くてフォレスとグラバーニッスよ」

アリス「？何ですか？」

ケビン「いや、いやいやっ戦場で無差別攻撃したからッスよ！！」

アリス「いけなかったんですか？別に数匹くらい殺したって良いじゃないですか」

ケビン「ハア…で隊長はどうするんスか？」

ご主人様「ずっとアリスといたいけどそうも行かないからね…残

念だけど僕は一旦戻るよ」

アリス「……解りました。寂しいですけど私はもう少し此方にいます」

ご主人様「解った、ケビン置いていくから……そう言えばパーティーだったっけ？アレ組んでみない？」

アリス「パーティー？……ああ、あの人達（アイル達）見たいのですか！？やってみたいです」

ご主人様「そう？良かった、実はもう僕とアリスとケビンで登録して来ちゃったんだ」

ケビン「ちよっ！？俺、まだ了解して無い」ボゴア

アリス「ケビン？ご主人様の決定に従えないの？」

ケビンが恐る恐る視線を下に向けると足下に10センチ位の穴が空いていた。

ケビン「（こっ怖え、副隊長、マジで今のはヤバいッスよ）」（泣）

ご主人様「後三人まで呼べるからね、アリス好きなようにその辺の酒場から誘ってみたら？」

アリス「はいっご主人様！！」

そう言ったアリスの頭を優しく撫でながらアリスのご主人様は続け

る。

ご主人様「あっソレとこの仮面を被って行動してね？変声器付きだから……念のためだよ」

そう言うとアリスに白い狐の面を渡し去っていった。

## 仲間探し

「酒場」

アリス「うあゝ散らかつてますね」

ケビン「いやあこんなもんスよ、酒場つてえのは」

此処はフォレスの端、ヒュグロス平原に最も近い街『パリス』、アリスとケビンは此処にパーティーのメンバーを探しに来ている。

アリス「所でケビンさん？」

ケビン「んん？何ですか副隊長」

酒場の端の方の席に着きながら、アリスが尋ねる。

アリス「その私のこと『副隊長』って呼ぶの止めてくれませんか？」

ケビン「どうしてツスカ？副隊長は副隊長ツスよね？」

アリス「はあ…これだからサ克蘭ボ君（童貞）は嫌なんです」

ケビン「ちよっ！？今はソレ関係ないじゃないツスカ！！」

アリス「全く……よく考えてみて下さいよ、一応私の見た目は『十歳児』ですから」

ケビン「俺の話は無視ツスカ！？……解りました、解りましたから

その目は止めて下さいッス」

アリス「ふう…まあ解ればいいです、それにまだ『見た目は』17何だから…その内良い人が見つかりますよ…たぶん」

アリスが哀れみをたつぷりと込めた視線をケビンに送ると、何故か店中に居る他の客にもケビンのサクランボの下りの部分のみ、聞こえていたらしく周り中からケビンに対して哀れみの視線が送られる。

ケビン「なっ何スカ！？何で！！皆さん！！こつちに！！！！哀れみの！！視線を！！送ってくれてやがんだこらあ！！！！」ガッシャーン

ケビンがキレた…………

その場に居る全員が今度は急にメソメソし始めた。

ケビン「うう、べつ別に俺は良いんです、副た……アリスみたいに○乱なたいちよゝのマ○奴隷みたいに成るより……ずっとましッ）ズゲラバボツ！？

ケビンが最後まで語る前に、顔を真っ赤にしたアリスに蹴り飛ばされる、もしこの場にAランク以上の冒険者がいれば戦慄を覚えたかもしれない…何故ならば一瞬…アリスに蹴られた横腹が消し飛び次の瞬間再生したからだ。

ケビン「あゝいつてえゝ何するんスカ！！」

アリス「意地悪するケビンさんが悪いんですよ……私を虐めて良いのはご主人様だけです」

ケビン「はあ、そうッスか……次は氣い付けますよ」

アリス「全く、いつも次わくって」

アリスとケビンが言い争っている中、野次馬達はあきたのかそれぞれ自分達の会話に戻っていった。ソレを見てケビンが頃合いだろうと酒場のマスターに話しかける。

ケビン「マスター」

マスター「何ですか？客さん」

ケビン「イヤ何『最近どうだい？相棒』」

マスター「！！『どうって何が？』」

ケビン「『なんて言うか……総合的に？』」

マスター「ふん、良いだろう付いてこい」

そう言うマスターは店の奥に消えていった。

アリス「あのっケビンさん？さっきの会話は？」

ケビン「アレでスカい？合言葉ッスよ」

アリス「ふん、ありがとう」

ケビン「良いッスよ、逸れよか……行きませんか？」

アリスとケビンがマスターに着いていくと、カウンターの下に有る

階段にマスターが入っていく、

マスター「そっぴゃあアンタら、こつこつ所は初めてかい？」

階段を下りながらマスターが問いかける。

ケビン「そつスけど、何か問題でも有るんスカい？」

マスター「いや……問題つてこたあねえがな、どうだ？銀三で此処の主な派閥と主な奴のことを教えるぜ？」

ケビン「どうしやしょうか？」

聞かれたケビンは、一応アリスに問う。

アリス「教えてもらいましょうか……ケビン払いで」

ケビン「ちよつ！？マジっすか！？……つて怖っ！！……ああもう分かりやしたっ！！分かりやしたから、睨まんで下さいッス」

アリスに睨まれ、ケビンはしぶしぶと、自分の財布から銀貨を三枚取り出し、マスターに渡す。

マスター「どうも、じゃあ先ずは勢力からだ……と言っても、此処（酒場）の……いや、この街の勢力は二つしか無いがな」

ケビン「へえ、それで？」

マスター「先ず一つ目は『ガラ』率いる『バリアード』、もう一つは『ガイラ』率いる『ゴレルア』だ」

ケビン「もう少し詳しく頼むっス」

マスター「良いだろう、先ずバリアードからで良いな？」

ケビン「頼むッスよ」

アリス「（階段長いです…っっていうか何ですか？これ、迷路みたいにあっち行ったり、こっち言ったり迷いそうです）」

仲間探し（後書き）

中途半端ですいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6056p/>

---

チートの旅

2011年2月15日16時35分発行